



# 水稻管理情報

## 中生穗肥編

## 穂肥の適期・適量施肥で、収量・品質確保！！

令和2年7月  
JA志賀  
能登南部営農推進協議会

### 1 生育概況と当面の管理

- 現在のコシヒカリの生育は、平年より2日程度早く、前年並みの状況となっています。
- 無効分げつの発生を防ぐため、幼穂形成期（コシヒカリでは7月10日頃、ひやくまん穀では7月20日頃）まで中干しを継続し、稻体の健全化を図りましょう。早生品種については幼穂形成期となるため、中干しを終了し、飽水管理を実施して下さい。
- 今後の管理として、①「適切な穂肥の施用」、②「中干し終了後から収穫期までの飽水管理」、③「出穂後の2回防除の徹底」に努めて下さい。

【参考 生育調査結果（6月29日現在）】

品種	草丈 (cm)			m <sup>2</sup> 当たり茎数(本/m <sup>2</sup> )			株当たり茎数(本/株)			葉齢 (枚)		
	本年	前年%	平年%	本年	前年%	平年%	本年	前年%	平年%	本年	前年%	平年%
コシヒカリ	60.5	110	116	537	94	104	30.9	96	118	10.6	100	102
ゆめみづほ	56.7	112	115	478	87	87	27.3	87	91	11.0	98	100
ひやくまん穀	58.7	126	134	532	91	110	29.5	91	114	10.9	106	112

### 2 出穂予測と穂肥時期の目安 【ポイント① 適切な穂肥の施用】

- 本年のコシヒカリの出穂期は7月30日頃と、前年並みの予想となっています。
- （6月29日時点の葉齢から判断）
- 田植え時期やほ場条件、気象条件等により出穂期は現在の予想から前後しますので、必ずほ場ごとに幼穂長（10～15mm）を確認した上で、穂肥を施用して下さい。

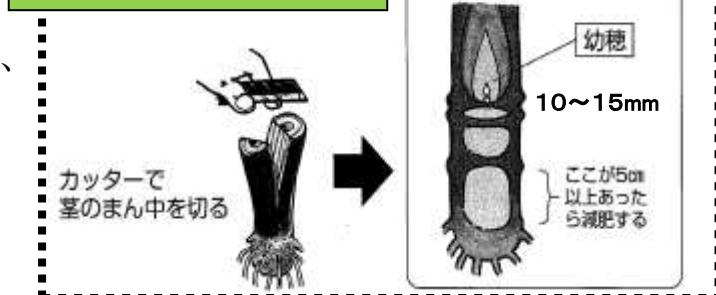
葉色が濃く、茎数が過剰で草姿の乱れているほ場の場合

1回目の穂肥時期を2～3日遅らせ、施肥量を2割ほど減じて施用し、  
2回目の穂肥は時期や施用量を変えずに行って下さい。

志賀米・能登米コシヒカリで基肥 BB 高度056号を28kg/10a 施用した場合

化学窒素成分量を3割削減させるため、BB 有機入り能登穂肥一発または BB 能登みのり（穂肥2回の合計）の施用量の上限は30kg/10a 以内として下さい。

#### 幼穂長による 穂肥時期の判断方法



### 【穂肥時期と施用量の目安（6月29日時点）】

品種名	出穂予測日	施肥体系	肥料名	穂肥時期 (出穂前日数)	葉色	施肥量 (10a当り)
志賀米 能登米 コシヒカリ	7月30日頃	一発体系	BB 有機入り 能登穂肥一発	7月11日頃（-19日） 幼穂長：10～15mm	3.75 以下	25～30kg
		分施体系	BB 能登みのり	1回目 7月11日頃（-19日） 幼穂長：10～15mm 2回目 7月17日頃（-13日）	3.75 以下 —	10～15kg 10～15kg

※ 分施体系の場合は、2回目の穂肥を規定どおりしっかりと施用して下さい。

### 注目!! 暑さに負けない！「志賀米・能登米コシヒカリ」の登熟向上対策

- 基肥一発肥料では、基本的に追肥の必要はありませんが、①近年の登熟期の高温による栄養凋落の防止と②収量の向上のため、以下の判断に基づいて上乗せ追肥を検討しましょう。

#### ★基肥一発肥料への上乗せ追肥★

＜判断＞出穂20日前（幼穂長3mm）の時期に、葉色が3.5以下の場合

＜使用＞時期：出穂16日前（幼穂長15mm）

施用量：有機アグレット727 15～28kg/10a (チツソ：1～2kg/10a)

判断時期の葉色を  
しっかりと見極めて、  
上乗せ追肥を実践して  
下さい。



収量確保対策チェックリストを活用して実践状況を確認し、収量確保に努めましょう！！

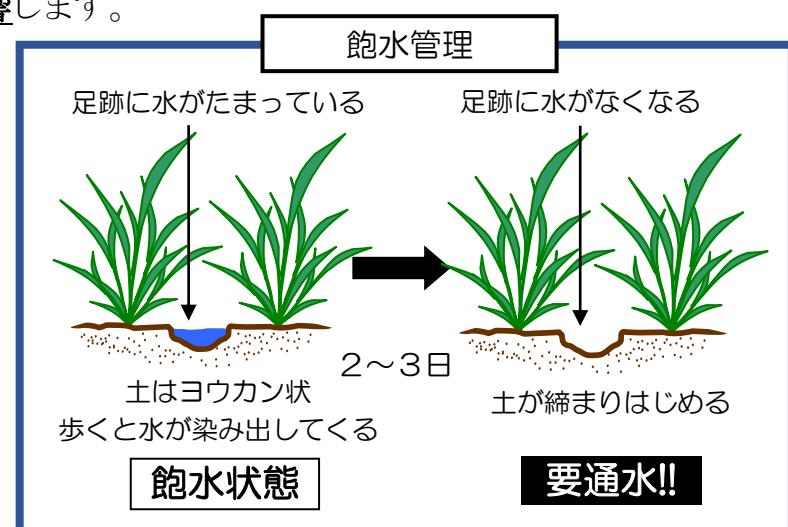
次ページに続きます。

### 3 中干し終了後～収穫期までの水管理 【ポイント② 中干し終了後から収穫期までの飽水管理】

- 登熟期間の水稻の活力を維持するためには、根を健全に保つことが重要です。
- 根の活力維持には、適期の中干しに加え、中干し終了後の水管理が大きく影響します。
- きめ細やかな水管理により、登熟を向上させ、未熟粒の発生を防ぎましょう。
- 水田の温度を上げないためにも、通水はできるだけ朝方か夕方に行いましょう。
- 夏期に湛水状態が続くと水田内の水温が上昇し、根腐れを引き起します。そのため、必ず3日以上の湛水はしないで下さい。
- 集落や地域ぐるみで計画的な水利用に努めましょう。

#### (1) 中干し終了後～出穂期までの水管理

- 幼穂形成期(コシヒカリ:7月10日頃、ひやくまん穀:7月20日)以降は、新しい根の発生が少なくなるため、中干し終了後は2～3日間隔を目安に通水し、飽水状態(右図)を保ち、根の活力維持を図りましょう。



#### (2) 出穂期～収穫期までの水管理

- 出穂期以降は、穂への養分集積(転流)を促進させるため、刈取り直前まで1か月以上は飽水管理を継続しましょう。

### 4 斑点米の発生防止対策 【ポイント③ 出穂後の2回防除の徹底】

- 病害虫発生予報(6月18日発表)では斑点米カメムシ類の発生が“多”と予想されています。
- 中能登管内の本年の状況においても、7月1日に実施した雑草地でのカメムシ類調査では、カメムシ捕獲頭数が“過去2番目に多く”、斑点米の発生が懸念されます。
- 斑点米の発生を防ぐために、基幹防除として出穂期の7日後(穂揃期)と14日後(傾穂期)の2回防除を実施しましょう。

#### (1) 基幹防除

##### ① 粉剤体系

- 粉剤防除では防除効果を高めるため、風の無い時間帯を見計らい、散布後3～4時間は降雨がない日に散布して下さい。

	病害虫名	薬剤名	散布量(10a)	散布時期	摘要
1回目	いもち病、紋枯病、カメムシ類	トレバリダビーム粉剤DL 2成分	3～4kg	7月26日～29日	出穂直前
2回目	いもち病 カメムシ類	ラブサイドキラップ粉剤DL 2成分	3～4kg	8月6日～9日	出穂7日後頃 (穂揃期)
3回目	カメムシ類	キラップ粉剤DL 1成分	3～4kg	8月13日～16日	出穂14日後頃 (傾穂期)

##### ② 粒剤体系

化学合成農薬成分数

- 粒剤防除は一人で散布できることや、粉剤のような飛散(ドリフト)が少ないため、市街地等でも散布が可能なメリットがあります。

	病害虫名	薬剤名	散布量(10a)	散布時期	摘要
1回目	いもち病、紋枯病、 カメムシ類	イモチエース キラップ粒剤 2成分	3kg	7月18日～20日	出穂10～12日前頃 (散布後4～5日の湛水)
2回目	カメムシ類	キラップ粒剤 1成分	3kg	8月2日～6日	出穂3～7日後頃 (穂揃期) (散布後4～5日の湛水)

##### ③ 液剤体系

	病害虫名	薬剤名	散布量(10a)	散布時期	摘要
1回目	いもち病、紋枯病、 カメムシ類	ビームエイトトレボンゾル + バリダシン液剤5 2成分 0成分	650倍・100L 1000倍・100L	7月26日～29日	出穂直前防除
2回目	カメムシ類	キラップフロアブル 1成分	1000～2000倍 ・60～200L	8月6日～9日	出穂7日後頃 (穂揃期)

#### (2) 隨時防除の実施

病害虫名	薬剤名	散布量(10a)	摘要
稻こうじ病 墨黒穂病	乙ボルドー粉剤DL 0成分	3～4kg	【予防剤】常発地では出穂10～14日前に散布 (出穂10日前以降は薬害の恐れがあるので散布しない)
紋枯病 稻こうじ病 墨黒穂病	モンガリット粒剤 1成分	3～4kg	【予防剤】常発地では出穂14～21日前に散布 (散布後4～5日の湛水)